

さまざまな筆記具を 使おう

鳥取大学教授 住川英明 すみかわ ひであき

「軟」の利点を生かす

「毛筆」の対義語として、新興の筆記具の総称である「硬筆」の語が使われるようになったのは、明治から大正にかけての時期とみられています。このことは毛筆の威光の大きさと同時に、「硬」に対応する「軟」、つまり筆毛の柔軟さに毛筆のもっとも大きな特質が認められていたことを示しています。

戦後の書写教育は、この「硬」と「軟」の間を埋めようとしてさまざまな試みを重ねてきたように思います。その過程で、はたして毛筆の「軟」は十分な役割を果たしてきたのか、「軟」への郷愁がむしろ「軟」の役割をあいまいなものにしてしまったのではないか—そんな危惧の念を抱いてしまうのは私だけでしょうか。

えられなければなりません。日常的なメモをとる場面では、謹直な楷書によらないのはもちろんのこと、筆先の太いフェルトペンを使うはずもありません。また、揭示文を書くこうとするとともに、草卒な行書によることはないし、鉛筆で書きつけるはずもないのです。筆記具の適切な選択は、中学校においても依然として大切な学習内容です。

中学二年生における実践から、さまざま

「毛筆」はすでに日常の筆記具ではないという明確な認識から、書写の授業づくりを始めなければなりません。先に使われていた毛筆と後で使われるようになった硬筆とを関連づけて学ぶというとならえ方から、毛筆による学びは硬筆による学びにどのように役立てることができるといふとらえ方へ、発想を転換する必要があります。

大学生に「書写の授業ではなぜ毛筆を使うのか」と問いかけてみると、真つ先に返ってくる意見の多くが「集中して活動できるから」「大きく書く気持ちがいいから」といった非日常性の利点に注目したものであることは、毛筆使用の現状を象徴しているとみてよいでしょう。

他にも「成果が出やすく、指導しやすいから」という授業者の立場を理解した意見や「毛筆の難しさを知り、硬筆の便

まな筆記具を使った「相手・目的を意識して」書く学びの一例を紹介しましょう。

「文字の大きさと配列の学習」 (五十分×全三時間)

お気に入りの漢詩を「今月の詩」としてクラスメートに紹介するという場面を設定し、そのための揭示作品を制作する活動のなかで、文字の大きさと配列についてのまとめ学習を行います。

共通の資料（漢詩「江南春絶句」）とその読み下し、解説文）を用意して、その上で書式（レイアウト）や筆記具については生徒の選択に任せます。「今月の詩」の題名・作者及び原詩については、必ず小筆を使うこととし、あとは筆ペン・フェルトペン（太・細）を選択して書写します。もちろんレイアウトを模索する段階では鉛筆も使用します。

色上質紙に書写したパーツを白い台紙（A3）に貼る方法をとることで、書き直しができないという負荷の大きさをやわらげています。生徒たちには先行する単元で、同じ漢詩を題材として文字の組み立て方について小筆で学ばせたの

利さを感じることができるよう」という学習者の痛みを感じさせる意見など、さまざまな回答が出てきますが、「文字の形、とくに細かな部分の形について意識し、理解することができると」とか「腕全体で文字を書くことによって、書くときの動きを学ぶことができるため」といった「正解」は意外に少ないのです。

筆記具を使い分ける

新しい学習指導要領では、小学校高学年の事項に「目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと」の一項が入りました。児童自身がさまざまな筆記具の特徴を知り、活用できる能力を身につけさせようというわけです。

中学校では第二学年の事項に「目的や必要に応じて、楷書または行書を選んで書くこと」として、生活の場面における書体の使い分けが明記されましたが、このことは筆記具の使い分けと連動して考

で、安心して取り組むことができたようです。

使うことの楽しさ

国語科書写の学びの基底には、まず学習者自身が自分の書く文字に愛着をもつことが定置されなければなりません。手書き文字を見つめ続けようとする文字意識、またそれらを支えるに十分な文字感覚は、まず自己を認めようとする態度なしには身につけません。むしろ書写力は生活のための技能ですが、手書きされた文字には否応なく書者の「個」が表われることも認めないわけにはいきません。

使う目的を明らかにした上で、さまざまな筆記具の特徴を生かすことはもとより大切なことです。しかし、そういった情報のやりとりを念頭に置いた筆記具の運用能力を考える前に、さまざまな筆記具を使うこと、そのこと自体の楽しさを思い起こしましょう。筆記具に対する自分自身の得手不得手を知る、ただそれだけでも楽しいことではないでしょうか。さまざまな筆記具を使ってみるだけで、自分の書く文字に対する見方や感じ方が変化することは、私たちが経験的によく知っている事実です。